

新約聖書 ヨハネによる福音書 6章 51節—58節（新共同訳）

<sup>51</sup> わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。」

<sup>52</sup> それで、ユダヤ人たちは、「どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか」と、互いに激しく議論し始めた。<sup>53</sup> イエスは言われた。「はっきり言うておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。<sup>54</sup> わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。<sup>55</sup> わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。<sup>56</sup> わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。<sup>57</sup> 生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる。<sup>58</sup> これは天から降って来たパンである。先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。このパンを食べる者は永遠に生きる。」

※第1朗読と第2朗読は末尾に掲載

### 説教「食べ物と言葉」

8月8日（木）、宮崎で起きた地震を受け、巨大地震注意喚起がなされるという異例のことが起きました。今回のことで、人間の命とは一寸先は分からない儚いものであり、人間の生活は、生と死が隣り合わせであることを思わされた人も多いのではないのでしょうか。

このような時期に聞く本日の福音書の言葉は、通常よりも深い響きを私たちに与えてきます。それは、イエスのこのような言葉から始まります。

「わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである」。

「わたしの肉」を食べるとは、取り方によっては、支配的なものに思えるかもしれませんが、そうではありません。ここには、イエスの究極の献身愛が表されています。

焼き上がったパンは、人々の手に取られ、裂かれ、人々の口に入り、体の中に入ってしまうと、個体としてのパンの姿は失われ見えなくなります。パンはいつまでもその姿のままに飾られるためではなく、食べられるために存在しています。つまり、その本体は失われ見えない姿になってこそ、すなわち人の体の中に入ってこそ、人の生命を養い、そして人の肉体の一部となるのです。

イエスがご自分のことを「生きたパン」にたとえるのは、イエスもそのパンのように、私たちの中に入り、霊的な力を与え、私たちを真に生かすものとなるために「天から降って来た」存在だからです。

さらにイエスはこう続けます。

「わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである」（ヨハネ 6:51）。

「与える」とは、「分け与える」「特別に死に渡す」という意味があります。ここにイエスの十字架の死、贖罪死が暗示されています。イエスは、その身を十字架につけることによって、その血と肉をわたしたちの罪のあがないのために与えられたのであり、そのことを思い起こし、その恵みを受けるために行われるのが聖餐式です。

律法では、「血の中に命がある、だから決して食べてはいけない」という教えがあります（レビ記 17:10-12）。ゆえに、「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる」（ヨハネ 6:54）というイエスの言葉は、ユダヤ人たちに衝撃と反発心をもたらしました。このことは、律法を重視するユダヤ人たちにとって、冒瀆的に聞こえたでしょう。

「わたしの血を飲む者は、永遠の命を得」とは、十字架で流されるイエス・キリストの血によって、人々が罪から解放され、永遠の命がもたらされることを意味しています。

イエスの血は、私たち人間の罪を清めるものであり、イエスの血にあずかる者は、死から解放され生命を受けるのです。旧約においても、血は生命であり、死から解放されたものと考えられました。

「血」と「肉」とは、ユダヤの思想においては、二分され切り離されたものではなく、一体となったものです。「血」と「肉」とは、結合して真の人間そのものを形成するのです。ゆえにイエスの血と肉をいただくことは、真の神であ

り人間であるイエスとひとつになることを意味します。さらに「食べる」は、同一化する、消化するという意味を持っていて、「天から降って来た生きたパン」であるイエスの肉を食することは、イエスの生命そのものを自分自身のものとするということです。ここに、イエスの聖餐式の意味を見ることができます。

「生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる」(ヨハネ 6:57)。

神は命であり、命の源泉です。その命は、肉体的な次元のものだけではありません。神のなすことは、常に霊の次元の光輝く命と愛へ向かっているのです。イエスが生ける神によって遣わされたということは、イエスが私たちに命を与える者であるということ。そしてその前に、イエスは父なる神によって生きていることがここで述べられています。

イエスが父なる神によって生きているように、主イエス・キリストを食する者もイエスによって生きるのです。ここではイエスの神からの派遣と、人間がイエスを食することが、同一線上に置かれています。

このような主イエス・キリストの十字架と復活、主イエスを「食すること」の意味と恵みが聖餐式には込められています。

「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む」というのは、聖餐を意味するものであって、イエスの十字架の死を記念した晩餐は、これにあずかる者に霊の賜物を与えるのです。

本日の福音書は「このパンを食べる者は永遠に生きる」というイエスの言葉で締めくくられています。主イエス・キリストのこの言葉は、揺るぎない永遠の命への、喜びにあふれた希望と契約の言葉なのです。

人間にとって、「死」は悪いものだという意識があると思います。

ですが、人はいつかは必ず死ぬ存在です。

そして、肉体の死よりも恐ろしいものは、「心の死」「魂の死」ではないでしょうか。

「心の死」「魂の死」とは、認知症などになったり、脳の機能が失われたりする等のことを指しているわけではもちろんありません。

周囲から見たら、何も分からなくなっているように見えたとしても、心は生き、魂は生きているのです。

イエスはこう言いました。

「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもいつもその人のうちにいる」(ヨハネ 6:56)。

人は、いつかは必ず死ぬ存在ですが、人はまた、肉体の死を迎える時も、神とひとつとなり、輝いて死ぬことができる存在なのです。

主イエス・キリストの御言葉と共に、私たちは、日々、心を新たにして、喜びにあふれて歩んで行きましょう。

\*\*\*\*\* 説教ここまで \*\*\*\*\*

以下、本日に関連する聖書箇所（第1朗読と第2朗読）です。

旧約聖書 箴言 9章 1節—6節（新共同訳）

<sup>1</sup>知恵は家を建て、七本の柱を刻んで立てた。<sup>2</sup>獣を屠り、酒を調合し、食卓を整え/<sup>3</sup>はしを町の高い所に遣わして/呼びかけさせた。<sup>4</sup>「浅はかな者はだれでも立ち寄るがよい。」意志の弱い者にはこう言った。<sup>5</sup>「わたしのパンを食べ/<sup>6</sup>わたしが調合した酒を飲むがよい/<sup>6</sup>浅はかさを捨て、命を得るために/分別の道を進むために。」

新約聖書 エフェソの信徒への手紙 5章 15節—20節（新共同訳）

<sup>15</sup>愚かな者としてではなく、賢い者として、細かく気を配って歩みなさい。<sup>16</sup>時をよく用いなさい。今は悪い時代なのです。<sup>17</sup>だから、無分別な者とならず、主の御心が何であるかを悟りなさい。<sup>18</sup>酒に酔いしれてはなりません。それは身を持ち崩すもとです。むしろ、霊に満たされ、<sup>19</sup>詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい。<sup>20</sup>そして、いつも、あらゆることについて、わたしたちの主イエス・キリストの名により、父である神に感謝しなさい。

教会讃美歌 151番「ひとの目には」1,2,4節、382番「ここは神の」1,2,3節、357番「主なる神を」1,2,3節、394番「主よ終わりまで」1,2,4節。